

次の受賞者、どんどん出てこい。

プロダクションサポート部門 電通クリエイティブピクチャーズ 大岡俊彦

JAC を受賞するメリットがあるんですよ。

1 会社のメンバーの見る目が変わります

それまで埋もれていた人でも、「受賞した人」というアイデンティティーが加わります。あなたが人知れず苦勞して、身近な人はわかってくれているけど、全然関係ない部署の人は知らないというのはよくあることです。そんな所まで受賞ニュースは轟くので、知らない人でも認知されますね。つまり、自分のブランディングになるよ、知らん人でも、ということです。ここが重要で、会社の知らん人が、「こいつ〇〇賞を受賞したんですよ」と別の場所に連れて行ってくれる可能性が出るということです。人間、知らない人に会うのを怖がるものです。先に自分のことを知られていることは、そのハードルを下げてくれます。

2 実はみんなスポットライトを当てたくてしょうがないと分った

審査員のみなさんは同業者です。クライアントや広告会社ではなく、プロダクションの人間ということです。会社は違えど、プロダクションの苦勞も歪みも分かっている人たちということです。だから若者がそれを突破することにスポットライトを当てたくてしょうがない、と分かりました。

ものすごいことをしてなくても、ちょっと工夫があったことで、プロダクションの仕事が少しでも良くなるなら、希望が持てるなら、スポットライトを当ててみんなで埋もれさせないようにしようぜ、という空気を最終審査では感じました。どこがいいところなんだろう？ どこを拾ってあげると、プロダクション業界にニュースとして届いてみんなが勇気づけられるだろう？ そういうことをみなさん考えながら、審査していると感じました。

革命的なことは目立つから別の場所でスポットを浴びればいいと思います。こういう場があったから初めて当てられるスポットライトって、あると思います。なので、次の埋もれた場所に当たるのが楽しみです。

僕は業界 27 年目のディレクターとして、若手たちに技術を教える「なるほど！ 実践塾」でプロダクションサポート部門の賞をいただきました。

「技術の継承」という問題は、今、どこの日本の業界でも問題になっているのではないのでしょうか。これまで繁栄を築いてきた技術が失われると、前の偉業を二度と再現出来ないことになります。つまりそれは進化を止め、衰退に向かうということでもあります。

いっぽう最近「技術の属人化をやめよう」という流れがあります。その人しか出来ない技術をなるべく共有できるようにしようということです。従事する人が減ってもうまく回るようにしよう、ということですかね。しかし映像技術というのは多岐なパートにわたり、一貫通貫した教科書を書くことは困難です。イマジナリラインからやったら専門学校が終わってしまう。だから僕は、ある程度は専門化、属人化するものだと思っています。凸凹で得意不得意な人がいて、そういう傭兵どもをチーム編成するのがプロ集団の醍醐味じゃないかと思います。それを才能ともいいます。才能と過ぐす人は、その才能を理解してあげることからスタートすると思います。そうでなければ、才能集団を編成して、自分以上の仕事をつくることが出来なくなるではないですか。

だからそのための基礎というのは、スペシャリスト技術の基礎を「やってみること」だと思うんです。なんでこうするのか、なんでこれをしないのか。原理的に、技術全部を隅から隅まで理解することはできないと思います。「ここまでは理解しています。ここからはできないので任せます」というのは、プロ同士のコミュニケーションにおいて大切なことだと思います。